

水辺とつながる暮らしを楽しむ

おしゃれな「リ・BAR」

少子化・定住化対策に向けたリバービジネスへの取り組み

Good Taste “Ri BAR” River-business - For halting the declining birth rate and promoting settlement of people



たなか けんじ
田中 謙次\*
Kenji TANAKA

1. 水辺でビジネスを目指す

2012年から越前市の日野川河川緑地公園で年に一度のBAR、おしゃれな「リ・BAR」をオープンしています。この取り組みは、水辺で新しいビジネスを創出し、少子化・定住化対策を目指すとともに魅力ある水辺のプラットホームをつくりあげるビジネス活動です。

私たちは、食と農・観光・健康・医療・精神・教育などを資源として、川というパブリック空間にエコノミー性を取り入れたリバービジネスを、日野川から世界へ発信しています。田舎人だからこそ田舎でしかできないこ

とを大切にしています。そこには、企業・商店・飲食業・学校・行政、経営者・専門家・学生・主婦など多様なビジネスパートナーが集まり、水辺を中心としたビジネスモデルを創出し、新しくて懐かしい、サステナブルな川のある社会づくりを目指しています。BARを楽しむ要素としてライブやパフォーマンスがあります。環境を超えたサルサダンスでエスニック風情を演出、ジャズでアダルトなムードに引き込むなど雰囲気づくりも大切です。家族、仲間や恋人との時間に笑顔があふれ、様々な人たちが思い思いに楽しんでいます。それがおしゃれな「リ・BAR」の魅力だと思います。水辺が大好きな「おしゃれなり・BAR実行委員会」が自然体で、

〈図-1〉2016年は8月24～28日の5日間オープンした

\* 一般社団法人環境文化研究所代表理事・日野川流域交流会幹事
Representative Director, Environment Culture Research Inst. Producer, Hinogawa Basin Exchange meeting

ほんの少しだけおもてなしをすることで、若者たちが集まり共感し合い、まるで外国にでも来たかのようなおしゃれな空間が日野川に出現するのです。水辺という素晴らしいフィールドで実践する「リバーツーリズム」は、若者が、田舎が、自然がこれからはますます楽しくなる、新しい「リバービジネス」なのです。

おしゃれな「リ・BAR」を通じて、これまで水辺にあまり関心がなかった人たちが、水辺のファンになっています。流域住民、県外在住者、外国在住者など誰もがいつでも訪れたいくなるように、今後は本格的なリバーツーリズムをつくりあげます。そして、一つでも多くの職業を創出し、流域が元気になることを目指しています。



〈図—5〉 テーブルマジックで大歓喜



〈図—2〉 飲食店が本物のおもてなし



〈図—3〉 サルサダンスとSUPが川の風景に溶け込む



〈図—4〉 音楽を聴きながら夜は流れる（湯川トーベン）



〈図—6〉 ロングカウンター越しの川と山の風景

## 2. 持続可能なリバービジネスと環境保全

おしゃれな「リ・BAR」はイベントではありません。リバービジネスなのです。補助金や助成金に頼らず、民間力だけで自立した経営をしています。とはいっても、日野川河川緑地公園は高水敷にあり、天候や増水の具合で経営が左右されるため継続的な黒字経営は難しく、今後のリバービジネスに向けて課題は山積しています。しかしながら、あえてこのような場所で経営することに大きな意義があります。それは、水辺という自然フィールドにあるエネルギーによるリラックスや免疫力の向上などがあります。自然が人に与えるエネルギーポテンシャルが高い水辺では、BARを楽しむ人だけでなく、散歩やジョギング、川で遊ぶ人、ただ川を眺めるだけの人にとっても自然からエネルギーが得られます。かつて、小松ら<sup>※1)</sup>が実証した川での体験型医療を日野川で実施した際に、高齢入院患者に生きる力が芽生えることを実感しました。また、夜の繁華街にあるBARとは異なり、自然の中にあるBARは誰もがやすらぎながら楽しめて、元気になる空間だと思います。

自然環境を保全しながらビジネスを成立させること、つまり自然からの恩恵に感謝しながら商業を継続的に発展させていくことがこれからのリバービジネスにとって重要となります。そのためにも、サステナブルな社会づくりを目指し、自然環境と調和する景観を創出するセンスが今後の課題となります。現在、日野川河川緑地公園が供用されて約20年が経過しました。利用者や利用形態が変わるなか、今後50年先に向けての新しいデザインが求められています。そのためには、現在の利活用からバグを抽出し、これからのニーズや環境負荷を軽減した設計に、ランドスケープデザインを取り入れるべきなのです。人は水無しでは生きていけません。まちと水辺の空間を分離するのではなく、まちと一体となった川のあるまちづくりこそが、人々の生活を有意義にすることでしよう。

お客様をまち全体でおもてなしすることがツーリズムの基本であり、リピーターを生み出す効果になります。



〈図—7〉 海外からのお客様



〈図—9〉ゆかいな実行委員会(左から5番目が筏洋介実行委員長)



〈図—10〉子どもはSUPで川体験



〈図—8〉音楽に合わせて踊りだすお客様



〈図—11〉大人は関連企画「リバトレラン」。ゴールで乾杯！

### 3. 連携

おしゃれな「リ・BAR」実行委員会(事務局:環境文化研究所)は10名程度、少数精鋭で運営しています。これまでは環境保護団体、自然活動団体や行政が主体となってイベントを行うことが多かったのですが、当実行委員会は企業経営者、会社役員、飲食店やファッション個人経営者など、さらには外国人も参加しています。地域のリバービジネスには多くの魅力がある証なのです。

そして、行政との連携も重要です。おしゃれな「リ・BAR」の会場には越前市役所が昨年、大型テント用のスクリュアアンカーを16基も設置しました。これによってアンカー用のコンクリートブロックの搬入が無くなったことで大きな経費削減が図られただけでなく、安全で安心できる河川利用ができるようになりました。アンカー設置はイベント時の利用だけでなく、防災時の開放空間として利活用ができるなど、越前市役所によっても大きな資産となりました。この工事は小さいですが、川のあるまちづくりの将来に向けた大きな一歩であると確信しています。このように、河川の利活用が進む中で、少子化・定住化対策の足枷となるルールがあるとすれば、行政はルールを変更できる専門家として今後も力を発揮すべきで、今回のような積極的な自治体こそが、将来、持続可能な自治体として生き残るでしょう。

実行委員会では私利私欲ではなく、地域全体の経営向上に取り組んでいます。おしゃれな「リ・BAR」は21時で閉店したのち、越前市内にははしご酒のお客様や、宿泊客など周辺への経済波及効果があるのは事実です。



〈図—12〉昨年度施工された河川公園内のアンカー

また、河川管理者との連携も重要です。治水・利水・環境だけでなく、水辺の利活用を提案し、地域住民が水辺に関心を持てるような運営を行うこと、経営の一部を民間に託すことなど、大胆で勢いのある戦略を立てることが川のあるまちづくりを成立へと導く秘訣だと思います。

多様な立場や団体や専門家が集合し、お互いに関心を持つことで、連携が強くなります。ネットワークの構築には、まず、共通の大きな「ねらい」を共有し、その「旗」に向かってそれぞれが活動を進めていきます。方法や手段が異なっても到着する山頂が同じであれば、登山しながら自然と連携が生まれてくるはずです。同じ「旗」を目指した仲間によるネットワークは強靱であり、本質的な連携が必ず生まれます。

#### 4. 今後の展開

河川空間をリノベーションする。海外では魅力的な水辺空間の活用事例が目立ちます。水辺は河川管理者をはじめ行政が維持管理や使用許可を執り行っています。私たちは、水辺の利活用にチャレンジしてきました。今後は水辺空間にランドスケープデザインを取り入れたリノベーションで、サステナブルな川のある社会づくりへの挑戦を行います。重要なことは専門家同士が強く連携する地域活性活動が、少子化・定住化対策を改善していくことです。民間企業も行政も「やれない、できない」ではなく、「やれる、やってみる」というチャレンジが対策改善には必要なのです。日野川流域交流会の奥村充司会長は、2015年3月に開催されたミズベリング・越前若狭会議の中で、「まちづくりはよそ者、若者、馬鹿者が必要といわれますが、福井の人は馬鹿者になれる人たちがとても多いのです。」とされています。それだけのパワーを持つ田舎人には多くの可能性が秘められています。地方が都市での活動を参考にして同じことをしても上手くいかず失敗することがあります。しかし、よく考えてみれば、人間が生きていくために必要な水、空気、食料などの生態系サービスは地方の田舎が宝庫なのです。川でいうなら、多くの資産と人口が集まる下流ではなく、豊かな資源や本質的な贅沢を得られる上流

は、上流社会といっても過言ではありません。里山や里川と人間がいい関係になり、世界的にもトップクラスのサステナブル社会が創出できるのは地方、つまり田舎しかないのです。

当初から実行委員として参加しているBAR経営者は、「水辺にお店を開きたい」と乗り気です。私たちの活動にも成果が出てきました。

どこにでもある風景の日野川でも、水辺に少しのデザインで景観を彩ることで、季節や時間ごとに様々な感情を表現してくれます。日本のどこの川でも可能性はあります。奥深い田舎を流れる川でも、まちの中を流れる川でも、風土に根ざした少々のエッセンスを加えると、待っていたかのように、おしゃれな若者が共鳴し集まってきます。若者が集うことで、川の空間が新たな価値観を生み出し、リバービジネスが発展すると思います。昔から受け継がれてきた川の習俗文化は一旦途切れてしまいましたが、今、川から離れてしまった若者が戻ってきて、新たな川の文化を創り出していくことでしょう。そして、私たちの活動が、少子化や定住化問題を笑顔で解決して行く一つの動機になると思い取り組んでいます。



〈図—13〉おしゃれな「リ・BAR」会場



〈図—14〉若者が確実に増えてきている

最後に、おしゃれな「リ・BAR」が継続できるのは、後援、協賛、協力いただきました、企業、団体、行政、飲食店、そして関わっていただけるすべての皆様とのチーム力によるところです。この場をお借りして感謝申し上げます。

※1) 石川治江・大野重男・小松寛治・吉川勝秀, 川で実践する福祉・医療・教育, 2004. 10. 10発行, pp. 12-30